

小林秀雄と一人称小説の問題

中村 俊直

はじめに

批評家の小林秀雄（1902年生－1983年没）は、日本の近代批評を確立した文学者として高く評価されている。彼はその青年期にフランス文学から大きな影響を受けた。特にボードレール、ランボー、ジッド、ヴァレリーなどの詩人や小説家は、小林秀雄の文学観の基礎を形づくった。

小林秀雄はその長い評論活動において繰り返し私小説の問題を取り上げた。それは日本の近代小説を論じる上で、この問題は避けて通れない問題だからである。ここでは小林秀雄における私小説の問題を考察する。

私小説、自伝、そして一人称小説

小林秀雄は「私小説」という言葉を二つの意味で使う。即ち、かなり限定された意味で使うこともあり、またしばしば非常に広い意味で使うこともある。このことが、小林が1935年（昭和10年）に発表し、私小説についての彼の中心的な考えを述べた「私小説論」の解釈を巡って、論議が生じた一つの原因である。小林は一体私小説を肯定しているのか、否定しているのかわかりにくいという指摘である。

限定された意味とは、この「私小説」という言葉の本来の意味である。即ち、日本の大正期の自然主義文学運動の時期に出現し、作者の身の出来事をほぼそのままに描写し、作者の心境を主観的に告白した小説作品、という意味である。

他方では小林はこの言葉を、ヨーロッパの一人称小説一般にも適用し、更には本来の意味での小説だけではなく自伝作品にも適用する。ジッド、ブルースト、ドストエフスキーなどの一人称小説を「私小説」と呼び、さらにはジャン＝ジャック・ルソーの『告白』のような自伝も「私小説」と呼ぶのである。一般的にはこれらの作品は「私小説」と呼ばれることはない。

しかしながら、これは小林が意識的、意図的に、この日本文学の用語を拡大解釈して使用していると考えられる。私小説を論じるにあたって、これをヨーロッパの一人称小説と対比させるために、後者もあえて「私小説」と呼び、同じ一つの観点から問題を論じようという小林独特のレトリックと戦略である。そうす

ることによって、日本の私小説をフランスやロシアの作家たちの書いた一人称小説と比較する事が出来、更に後者の視点から前者を批判の対象とすることができるようになるからである。

小林秀雄が日本の私小説の特質を論ずる際、その参照基準として取り上げるヨーロッパの文学者は、特にルソー、ジッドそしてドストエフスキーである。

小林秀雄は「私小説論」の発表の前年の1934年に、その原型ともいうべき短い考察を書いている。それは、「文学界の混乱」と題された評論文の後半部分を構成し、「私小説に就いて」という題をもつ一章である。

その中で、小林はジャン＝ジャック・ルソーの名前を引き合いに出して次のように言っている。

私小説の先祖は恐らくジャン・ジャック・ルッソオであらう。少くとも彼は私小説の問題を明瞭に意識して文学に導き入れた最初の人物であった。[中略] 作者は自伝を書いて文学作品となしてゐるのだ。又言ひかへれば『懺悔録』の客観性は、彼が己れを忌憚なく語るといふ当時前代見聞の企図を信じた事による。何故信じたか。社会が自分にとって問題ならば、自分といふ男は社会にとって問題である筈だ、と信じられたが為である。(Ⅲ、21)⁽¹⁾

そしてこの評論文を次のようなドストエフスキーを賞賛する言葉で締めくくっている。

僕は今ドストエフスキイの全作を読みかへさうと思つてゐる。広大な深刻な実生活を生き、実生活に就いて、一言も語らなかつた作家、実生活の豊富が終つた処から文学の豊富が生れた作家、而も実生活の秘密が全作にみなぎつてゐる作家、[中略] かういふ作家にこそ私小説問題の一番豊富な場所があると僕は思つてゐる。出来る事ならその秘密にぶつかりたいと思つてゐる。(Ⅲ、23-24)

このようにヨーロッパの作家たちを参照基準とし

て私小説の問題を論じることが彼の戦略である。特にルソーの『告白』（自伝）とドストエフスキーの『地下室の手記』（『地下生活者の手記』）（虚構の一人称小説）という二つの基準点を意図的に設定し、その間にこの問題の全てを置いて考えてみようという目論見である。

私小説と自伝

1935年発表の「私小説論」もやはりルソーの『告白』の冒頭部分の引用から始まる。そしてその後小林は次のように付け加える。

僕がこゝで言ひたいのは、このルッソオの気遣ひ染みた言葉にこそ、近代小説に於いて、はじめて私小説なるものの生れた所以のものがあるといふ事であつて、第一流の私小説「ウェルテル」も「オオベルマン」も「アドルフ」も「懺悔録」冒頭の叫喚無くしては生まれなかつたのである。（Ⅲ、379）

一般的に言えば、私小説とは一種の自伝的小説ということになるが、これは二律背反的な二つの要素を結合した概念であると言える。なぜならば、小説とは本来虚構の世界を構築することであるとするならば、作者と語り手と主要人物が同一であることを前提として、作者の「私」をできるだけ事実に近い形で叙述するということは、それ自体一つの矛盾した行為ということになる。作者と語り手と主要人物が同一であつて、作者個人の姿を出来得る限りありのままに正確に描こうとすれば、それは自伝や日記という形になるはずである。

逆に、小説であることを追求すれば、その題材を作者の身辺的な事柄に限定せずに、想像力によって虚構の世界を構築することが必要となる。このように「私小説」それ自体が含んでいる矛盾は、そのままこの観点からの私小説への批判として現われることになる。

自伝と私小説は作者と語り手と主要人物が同一であるという共通性をもつとはいえ、私小説には自伝を構成する基本的な原理、即ち、作者個人の人格の歴史をかなりの長期間にわたって統一的な視点から回顧的に語るという原理が存在しない。

それにもかかわらず小林がルソーの『告白』を私小説の原型とみなす理由は、ルソーが自己認識、自己探求を徹底的に行つたからである。そして小林が強調することは、自己認識を徹底すれば、当然、自己を取り巻く他者や社会を問題にせざるを得ない。ルソーは自

己と社会や自然との対決を徹底的に生きたということである。この点において、小林は日本の私小説に不満を抱くのである。即ち、日本の私小説において描かれる「私」は、「社会化した『私』」（Ⅲ、381）ではないと言う有名な批判である。

ドストエフスキーの一人称小説

小林は「私小説論」の翌年（1936年）に発表した評論「思想と実生活」の中で次のように述べている。小林のこの言い方は微妙である。私小説を批判しながらも、その一方では私小説が目指すべき一つの到達地点を示しているからである。

若し彼（＝ドストエフスキー）が「私小説」乃至は「心境小説」を書いたらどうなつただらう。想像するさへ馬鹿々々しいが、幸ひ彼には書けなかつた。併し、若し書いたら、この様になる筈だといふ証明はして置いてくれた。「地下室の手記」が即ちそれである。（Ⅳ、67）

小林は後年（1948年）になって発表した評論「罪と罰について II」の中でやはり『地下室の手記』に触れながら一人称小説の問題を論じている。この中で小林は、ドストエフスキーの初期の重要な作品は、すべて一人称小説の形式を用いていることを指摘し、なぜそれほどにまで、ドストエフスキーが一人称小説にこだわつたのかと問う。小林はこの問いに自ら答えて、それは「自分とは何かといふ難問」（Ⅷ、315）にこの小説家が見つかりかけていたからだと答える。この見解はドストエフスキーに対する客観的評価というよりも、むしろ小林自身の一人称小説に対する評価を反映している。

この『地下室の手記』も告白的な一人称の叙述という形式を採っているが、作者と語り手（＝主要人物）は同一ではない。即ち作者の実生活から離れた虚構の世界を構築している。作者が直接に体験した事柄だけを素材として、作者の心境だけを披瀝するような小説を書いてもそこにはおのずと限界があるからだ、と小林は考える。私とは何かという問いを追究するためには一つの「実験室」を作る必要があつたのである

小林はドストエフスキーの『地下室の手記』に一人称小説の理想的な形、というよりもむしろ一種の極限的な形、小林自身の言葉を借りれば「その最も烈しい純粋な形」（Ⅷ、319）を見ていた。この小説は一人称小説という枠組みを保持しながらも、内的論争や内的葛藤に満ちている。それ故、これ以上、この内的な

論争や葛藤を押し進めれば、それはもはや一人称小説の枠を破壊してしまうことになるだろう。その意味において『地下室の手記』は一人称小説として極限的な小説なのである。

小林秀雄自身の小説

ところで、評論家小林秀雄は彼自身その青春期において七つの小説を書いている。1922年、即ち小林が丁度20歳の時に発表した最初の小説作品の「蝟の自殺」（三人称小説）を除いてはすべて一人称小説である。小林自身の一人称小説もまた多かれ少なかれ「自分とは何か」という難問に答えようという意図が透けて見える。それは特に彼の最初の一人称小説である「一つの脳髓」（1924年）と、最後の小説作品となった「Xへの手紙」（1932年）にはっきりと見て取れる。しかしこの二つの小説はその形式も内容も全く異なっている。

「一つの脳髓」においては作者自身の実生活の経験が述べられており、私小説的な色彩が色濃く出ている。しかし「Xへの手紙」は同じ一人称小説でも、前者にはまだ豊かに見られる外界の現実描写も殆ど消え、それだけ「自分とは何か」という問題を突き詰めているといえる。そして、それと一見矛盾しているようであるが、実は自己とは何かと突き詰めるためには、他者が必要であるという事を示している。即ちこの作品全体が「X」と呼ばれている友人にあてた書簡という形式を採る事によって、自己はその窮極ではやはり他者を必要とすることを示している。「Xへの手紙」は告白体であると同時に書簡体であることによって、自己の内部を掘り下げるとともに、他者への呼びかけという対話的契機が作品の中に導入されている。「一つの脳髓」には確かに自然描写や外界の現実の描写はあるけれども、自己を支えてくれるような他

者は存在しない。「Xへの手紙」には外界の現実描写は殆ど無いけれども、形式的にも内容的にも「私」は「X」と呼ばれる他者を必要とすることが示されている。従ってしばしば主張される見解とは反対に、構造的にはむしろ「Xへの手紙」の方が開かれた小説なのである。

おわりに

小林秀雄にとって、私小説の問題は、日本の近代小説の問題、または自然主義小説の問題に限定されるものではなかった。彼にとっては、ここから、一方では小説形式一般の問題、特に一人称小説一般の問題に発展する。他方では私小説の問題は「自分とは何か」、「自分について語ることはどのような意味があるのか」という問題と密接な関係がある。そして、さらには、自己と他者・社会・自然との関係の問題ともつながる。逆に言えば、小林にとっては、私小説の問題は、この思考の発展の道筋を逆にたどることによってしか明らかにされ得ないことであった。小林は一人称小説に特別な地位を与える。なぜならば「小説とはいかにあるべきか」という問題と「自分とは何か」という問題の両者がここで交差するからである。小林が私小説を繰り返し批判しながらも、決して全面的に否定しない理由の一つはそこにある。

注

- (1) 小林秀雄のテキストの引用は次の全集版に依拠し、本文中の引用の末尾に、その巻数と頁数のみを記す。
『小林秀雄全集』（第5次小林秀雄全集）全14巻別巻2巻、新潮社、平成13年～14年
ただし、引用文においては、原文の旧字体を新字体に修正してある。

なかむら としなお／お茶の水女子大学教授